

## 雪崩れ

現今の物語ではない。明治——それもやうやく十何年かの春の初めの頃と思ひ給へ。

長い冬中降りこめた雪が、真白に積固まってまだ解けもやらない山国の山々にも、春が来れば春の日影が射した。雪の中からすつと伸ばした裸木の枝の端々には、何時か、油絵具を篩ひ落したやうな緑の木の芽が山に住む人々に冬の終りを告げがほに萌してゐた。

暖かな日が三日続いて、山々に積んだ雪も少しづつ、解け始めた。と、また今年の雪の終りか、羽のような淡雪が降る日が来た。

奥深い山の中の一軒屋、壮吉父子の家の戸口にも明るい春の雪片が乱れ落ちた。

「莊吉、また降りだしたな。」

父親は、重たい雪沓を足に穿きながら、囲炉裡の縁に蹲まる莊吉に声をかけた。

「え、生憎だね、お父っあん。これでもやっぱりお父っあん出掛けるかね。」

「あ、行くとしやうよ。暫く行かなかつたから、問屋でも待

ちかねてるだらう。」

父親は事もなげに言つて、土間に立上つた。

莊吉は雉子や山鳥や山鶴などの獲物が一ぱい入つた網袋を棚から下して父親に手渡した。

「お父っあん。重いね、今日は。」

「ハハハ、暫く行かなかつたから、獲物も溜つた。どら、行つて行けるかな。莊吉、帰りはやっぱり明日になるから、今夜は氣を付けて留守をするのだよ。明日あたり天氣が晴れると、もう山の雪が解け出す頃だ。きつと方々で雪崩が始まるぞ。氣を付けるのだよ。帰りにはまた甘いものでも買つてくるからな。」

やがて父親は、獲物の網袋を重さうに肩に掛けると、淡雪の戸口を出て行つた。

父と二人きりで山の中の一軒屋に住む莊吉は、獵師を生業としてゐる父親が、溜つた獲物を町の間屋に卸しに行く度、山を下る毎に、たつた独りで淋しい家の留守をしなければならなかつた。昼間さへ減多に人も通らない深い山の中であつたけれども、慣れた莊吉にはたつた独りで留守するのもそんなに淋しい事でもなかつた。

今日もかうして莊吉は囲炉裡の縁に独りぼちになつた。莊吉は藁を持出して父の雪沓を作つたり、鉄砲の手入れをしたりして相手のない時を過した。

やがて、行燈を灯して晩飯を済ますと、別にする事も無くなつて、囲炉裡へ薪を焚きつきながら、古い絵本などを取出して